

審査報告書

文学研究科日本語日本文学専攻

モハマド・イムラン

題目：芭蕉とアッギェーエ考

主査 板坂 則子

副査 石黒 吉次郎

副査 村尾 誠一

(東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 教授)

本論文は、インドの詩人・小説家として高い評価を得ているアッギェーエ（1911～1987）と日本の俳句を導いた芭蕉（1644～1694）を、その紀行文を通して比較検討して両者に共通する芸術至上主義の在り方を明らかにし、かつインドでの俳句導入の歴史を内容面と形式や歴史等の知識的側面から追ったものである。

イムラン氏は本論に入る導入として、まず「文学面から見たヒンディー語の歴史」と題して、インドに於ける BC10C から現代までの文字と言語の歴史をヴェーダ・サンスクリット語から現代インドの国語とされているヒンディー語まで追い、その中に現れた主な文学史を取り上げている。インドに於ける言語の変化が宗教と密接な関係を持ち、文字はその使用階層や使用ジャンルによって使い分けられ、古代に於いては長大な韻文中心の哲学的な思想を内包するヴェーダ中心であったのが、次第に使用層を広げて俗化していき、さらにイスラム教の伝播によって大きく変化していく様相が示されている。日本における今後のインド文学研究に益すると思われる。

次いで、インドにおける俳句導入の歴史が、タゴール（1861～1941）、アッギェーエ、サトヤ・ブシャン・ワルマ教授（1932～2005）の三人を中心に述べられるが、挙げられたのはベンガル語を使うアジア人初のノーベル文学賞受賞者であるタゴールを除いてはヒンディー語圏の人物であり、前章を受けたかたちとなっている。タゴールとアッギェーエは日本語を解さなかったが、それぞれ俳句、特に芭蕉の句に触れて母国語に訳している。タゴールは、三行詩という抑制された言葉の中に顕された凝縮された思想に感銘を受け、インドを代表する人気詩人であったアッギェーエは、二度の来日を通して俳句に強い関心を持ったが、それは言葉を凝集することで人間の精神を込めるという禅宗に通うものとして捉えたのであり、以後の詩集で 28 句の俳句をヒンディー語に訳し、自らも俳句に倣う短詩を書いている。アッギェーエは俳句を英語訳からヒンディー語に訳しているが、イムラン氏はその原本を求めて当時の英語圏での俳諧関連の書を網羅的に調査し、その結果、A. Miyamori “An Anthology of Haiku Ancient and Modern” The chugai Printing Co.Ltd, 1932 の可能性が最も大きいとしているが、この綿密な研究方法は本論の信頼性を大きく高めている。ワルマ教授はインドに日本学の基礎を築いた研究者で、日本語に堪能で、ヒンディー語で俳句の形式や歴史の変遷、そして代表作などを紹介した人物である。ワルマ教授の『ジャパニ・カヴィターエ、訳：日本の韻文集』で取り上げられた俳句の歴史的、形式的、内容的解説はイムラン氏による長文の丁寧な翻訳によって紹介、分析されているが、これは俳

諧の深い知識が必要な翻訳作業であり、インドの俳句享受の到達点が的確に捉えられている。本章は丁寧な作業が続き、インドと日本の文化の棧になりたいと希望するイムラン氏の強い信念の伺える好論となっている。

以後の章はアッギューエと芭蕉の具体的な比較考証がなされている。まず日本における韻文の歴史と芭蕉の文学史的な位置について述べられているが、この部分は文章が生硬で、内容的にやや粗く、イムラン氏の論の方向性が示されていないのが残念である。次いで本論の中核となるアッギューエの『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード（この旅人は記憶に残るだろう）』（1953年）と芭蕉の『奥の細道』（1689年）の詳細な比較検討がなされている。インドでは紀行文の歴史はほとんどなく、アッギューエのこのインド国内の六つの旅行を扱った紀行文は極めて初期の例となるが、アッギューエは旅に出る動機を「動くことこそが人が生きるということであり、一ヶ所に留まり動かないことは死に等しい」と述べ、「人生こそ旅」という哲学的姿勢を見せている。またヨーロッパ紀行『エク・ブンド・サフサ・ウチリ（急に飛んだ一滴）』（1960年）では芭蕉の「やがて死ぬ けしきは見えず 蟬の声」という俳句を載せる。アッギューエの紀行文は芭蕉を意識し、旅と死をみつめる思索を大きく感じさせるものであると分析されている。

アッギューエ『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』と芭蕉『奥の細道』をイムラン氏は、一 過去の著名な歌人、二 著名な遺蹟や遺構、三 各地の風俗（名所、花など）、四 歌枕、五 詠んだ俳句・詩、六 人々との繋がり（俳人たち・その他の人々）、七 旅への想い、の七点で比較し、そこから、歌枕の地を辿る旅であっても名所としての光景より、名歌を詠んだ古人への追憶に浸り、旅で新しい出会いを重ねる芭蕉に豊かな人間関係を築く旅を見出し、対してアッギューエは人間への関心が薄く歴史的な事象に惹かれている所は対照的であるものの、両者は共に芸術至上主義者であり、敢えて自らを過酷な環境に追いやることでその芸術の完成を目指したところに大きな共通点を見出している。イムラン氏の論は、比較文学的な視点で二人の国民的詩人、俳人を取り上げ、俳句の精神がどのようにインドの人々に取り入れられ、アッギューエが如何なる俳句の理解で芭蕉への強い共感を持ったかを追求しており、二つの異なる文化の交流の一側面を極めて実証的に検証している。日本の韻文知識など、いまだ独自の視点を持つに至らないところもあるが、今後の日本とインドの文化研究において確実な足跡を残すものであり、博士の学位を授与するにふさわしいと判定する。